

氏 名：今野真理子

所 属：人文学部法経政策学科 1年

派遣先；ベトナム国立農業大学（ベトナム）

派遣期間；2015年8月20日～9月3日（15日間）

〈日本語教室での指導内容〉

・ビギナークラス

ベトナムの学生2～4人と山大生一人がグループになって教えた。初めて日本語を学ぶ学生が多く「ひらがな・カタカナ・動物の名前・挨拶・自己紹介」を主に教えた。ひらがな・カタカナはホワイトボードに大きく書き、発音と共に教えた。「つ」や「じゃ・ぎゃ」などの発音が難しいようだった。発音の違いを上手く学生に伝えられないときが何度かあったが、アドバンスクラスの学生に手伝ってもらいながら練習した。ビギナークラスの時間にも必ずアドバンスクラスの学生が来てくれて、一緒にビギナーの学生に発音や文法を教えた。挨拶・自己紹介は日本語、英語、ローマ字で書いて教えた。英語が話せる学生がいるときは英語を通じてコミュニケーションをとることができた。

・アドバンスクラス

ベトナムの学生2～4人と山大生一人がグループになり、普段使用しているテキストを使い、練習問題や宿題をやった。アドバンスクラスということもあり、「つ」などのベトナム人には難しい発音もしっかりできていた。文法を教えるときは、一つの文法に対していくつかの例文をみんなで考えるようにした。多くの例文を考えることで、語彙を増やし活用を覚えることができた。宿題は、学生に問題を解いてもらい、間違いがある場合は指摘した。また、一つのトピックを決めてグループごとにディスカッションをして日本語で発表するという活動も行った。トピックは「日本の観光地について」が多かった。観光地を訪れた際の会話やガイドする内容など、グループによって様々な発表があった。普段から大勢の前で日本語を話す環境があることが、日本語の上達につながっているのだと思う。ディスカッションをしている際に、事前に「東京や京都・桜や着物」などの写真を準備していくと話しやすかったと思う。日本語の歌も歌った。（ありがとう・大きな古時計）以前からこの歌を練習していたようで、みんな歌えていた。「大きな古時計」はベトナム語でも歌った。同じ歌をお互いの国の言葉で歌えることがとても嬉しかった。



〈日本語教室以外での現地での交流活動〉

天候は山形よりも暑く感じた。歩いているだけで汗をかくほどだった。ほとんど毎日晴れていて天気良かったが、帰国二日くらい前に信じられないほどの雨が降って、道路が冠水していた。そんな雨の中でもみんなはカップを着てバイクで移動していて驚いた。

毎日3食外食で、ベトナム料理で有名なフォーやソイセオ、バイミーを食べていた。初めはベトナムの食べ物に慣れるのに苦労した。ベトナムの食事に慣れなくて、これで2週間過ごせるだろうかと不安になったこともあったが、だんだん慣れた。バイミーがとてもおいしかった。ベトナムの学生は授業が終わるといろんなお店に連れて行ってくれた。ベトナムでは日本語クラスの学生みんなと一緒にご飯に行くことが多く、学生みんなの仲がとても良いのが印象的だった。

授業のないお昼の時間は学生が私たちの部屋に来てくれて、一緒に話したり、日本から持って行った紙風船でチーム戦をしたりした。休日はハノイセンターや水上人形劇、海へ連れて行ってくれた。ベトナムの観光地へ行くことで、ベトナムの文化を知ることができてとても楽しかった。

授業では私たちが日本語を教えたが、授業外では学生にベトナム語を教えてもらったりもした。簡単な挨拶や、ありがとう、ごめんね、数字などを教えてもらった。現地の学生は日本語がとても上手なので普段は日本語で会話していたが、やはり現地の言葉で「ありがとう」などを言えるようになると、より現地学生との距離が縮まったと感じた。



〈プログラムに参加した感想〉

初めて行く海外がベトナムということで初めは不安も大きかったが、ベトナムの学生から学ぶことはとても多く、参加してとても良かったと感じる。まず、ベトナムの学生の日本語を学ぶ姿勢を見て自分も外国語を学ぶ意識が高まった。ベトナムの学生は私たちとほとんど日本語で会話していて、わからない言葉はすぐに質問していた。「私は将来日本で働きたいから、毎日日本語を勉強します。」と話してくれた学生もいて、日本語を学ぶ決意の強さを実感し、私も学ぶことに対して積極的にならなければ、と強く感じた。また、ずっと連絡を取り続けたいと思える海外の友達を持つことができたことがとても嬉しい。2週間のプログラムを終えて帰ってきても、日本語や英語でメールや電話をくれたりする。ベトナムは人とのつながりが強い、とてもあたたかい国だと思う。そんな国の学生と友達にな

る機会をくれたこのプログラムに感謝したいと思う。

〈自分の目標の達成度や努力した経緯〉

日本語を教えることについては、自分がいかに感覚的に日本語を使っていたのか、ということを感じた。助詞の使い方を質問されても、その違いを上手く説明できなかつたりして一緒に活動していた山大生と考えながら教えていた。毎日、日本語教室に来てくれる人数やレベルが異なることに苦戦した日もあった。でも、自分がひらがなから教えていた学生が、私が日本に帰る頃にはテキストを使って文法を勉強するまで進むことができたときにはとてもやりがいを感じた。毎日日本語を教えていく中で、学生が苦手な発音や間違えやすい活用などがわかってきた。プログラムに参加した山大生で気づいたことを共有し、「このように教えたほうが分かりやすいようだった」など少しずつ教え方を改善していくことで、学生にとって有意義な授業にすることができたと思う。

〈今後の展望〉

今回のプログラムで、異文化を理解すること、海外の友達と交流することの大変さと楽しさ、日本語を教えることなどたくさんを知り、新しい関心が生まれた。また、場面に合わせて臨機応変に動く力、自分から積極的に交流しようとする姿勢を身に付けることができたと感じる。これからの大学生活の中で、2週間の経験を得て変わった自分、変えていかなければならない自分を客観的に見て、良い方向に改善し続けていきたい。そのためにも一日一日、計画と実行、反省、改善策を毎日意識して生活していきたい。

貴重な経験をすることができたのも国際交流室の先生方や現地と一緒に行動してくれたベトナムの学生、山大生のおかげです！本当にありがとうございました。またベトナムの友達に会いに行きたいです！！

